

「宮城県図書館130年のあゆみ —青柳文庫とその志を引き継いで—」

展示期間：平成23年11月3日(木)～平成24年1月25日(水)



▲ 戦災で焼失した青柳文庫書庫

明治14年(1881)7月25日、当館は「宮城書籍館」として創立され、今年で創立130周年を迎えました。創立時の蔵書は、仙台藩ゆかりの「青柳文庫」と「養賢堂文庫」がその礎となりました。

「青柳文庫」は、仙台藩出身の商人・青柳文蔵(1761-1839年)が蔵書と運営基金1千両を献上し、仙台藩に開設を願い出たものです。藩は目付2人をおき公開文庫として運営にあたったことから、我が国の公共図書館のさきがけと評されています。

今号の特集では、現在開催中の特別展とともに当館展示室についてご紹介します。

宮城県図書館創立130周年・青柳
「宮城県図書館130
—青柳文庫とその
(展示室)」

特別展 第2部 展示室 西側展示コーナー

◆ 青柳文庫とその志を引き継いで ◆

このコーナーでは、明治14年(1881)、当館創立時の蔵書の礎となった「青柳文庫」を紹介しています。仙台藩出身の商人・青柳文蔵の旧蔵書で『棠陰比事物語』(南宋・桂万榮編纂による裁判実話集)等、法律や医学関係の書物から『明月記』『西遊記』などの読み物まで幅広い蔵書構成となっています。



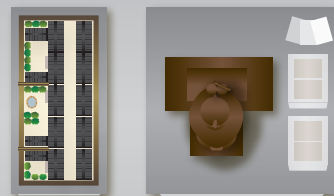
◀ 青柳文蔵肖像

『六代治家記録 卷之八十』(写本)には、第十二代藩主・斉邦(龍山公)の治世、天保元年(1830)閏三月二十八日条に、青柳文蔵がその蔵書二八八〇部余りと文庫運営の基金を仙台藩に献上し、十人扶持を賜ったことなどが記録されています。

特別展 第2部

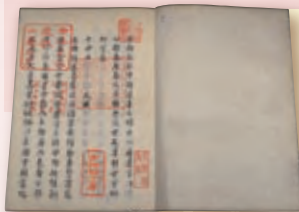
◆ 青柳文庫とその志を引き継いで ◆

展示室 西側展示コーナー



▲ 江戸時代 仙台的出版文化コーナー(復元模型)
(左) 国分町十九軒の本屋・版元
(右) 仙台藩校「養賢堂」の学習用具

《入口》



明月記 第二冊
藤原定家著
写本(寛文一延宝九)
印記「青柳文庫」
「宮城師範学校蔵書」
藤原定家の日記で、題名は定家が住む社参籠の際の宣告「次月明らかなりに」に基づくものという。源平の戦いから鎌倉幕府成立期の社会情勢や「新古今和歌集」の成立状況などが克明に記されており、当時を知る上での第一級の資料となっている。



伊勢参宮名所図会 第二冊
徳富基(関月編・画)
刊本 寛政九年
大阪 塩屋忠兵衛
印記「青柳文庫」
「宮城師範学校蔵書」
名所図会、地名・名所・寺社などの沿革を説明した絵入りの通俗図誌で、近世後期に数多く刊行された。本書は伊勢を中心として参宮の旅程の名所・旧跡を網羅した案内書「分道ブック」兼伊勢地誌となっている。



展示室ではこれまでさまざまな特別展を開催してきました。
今年度開催した展示会についてご紹介いたします。



1 平成23年1月15日(土)～平成23年8月31日(水) 「宮城に眠る玉手箱～のぞいてみよう児童資料の世界～」

この特別展ではちりめん本を中心に、当館所蔵の児童文芸誌、紙芝居などを展示しました。ちりめん本とは、クレープ状に細かく皺を寄せ、柔らかくしなりとさせた和紙で製本された和綴じ本です。開国間もない明治時代来日した外国人にとって、着物の生地のような素材感を持つちりめん本は、日本の昔話や風俗などを題材としていた多色木版刷りの絵入本として、格好の土産となりました。日本文化が流行していたヨーロッパ本土でも、ちりめん本は人気をよび、数力国語に訳され、輸出や国際共同出版までされるようになりました。

3 平成23年9月6日(火)～平成23年9月30日(金) 「三重の魅力」

三重県立図書館の協力を得て交流展示を開催しました。東日本大震災の発生以降、三重県立図書館は被災者や被災地の図書館への支援を実践されています。今回、三重県立図書館からは三重県に関わる本、松阪牛や真珠など「三重ブランド」のパネルをご提供いただきました。

2 平成23年8月6日(土)～平成23年8月31日(水) 「宮城の魅力再発見」

「宮城に眠る玉手箱」と併設する形で開催しました。当館所蔵の近世の塩竈・松島の様子を描いた絵図や、松島を訪れたブルーノ・タウトの日記、仙台駄菓子にまつわる資料や白石和紙で編まれた本などを展示しました。
また、七夕の時期ということで、来館者に、書いてもらった短冊や、折ってもらった折り鶴を復興七夕とし、展示室内に飾りました。

4 平成23年10月6日(木)～平成23年10月27日(木) 「『ことばのうみ』に集う—宮城県図書館だよりとみやぎゆかりの作家たち—」

平成10年3月に、当館はこの紫山の地に移転・開館しました。その記念として、宮城県図書館だより「ことばのうみ」を創刊し、今年の8月に第37号を発行しました。
この特別展では、創刊号の高田宏氏から最新号のサンドウィッチマンの二人まで、巻頭エッセイを執筆してくださった方々の著作を展示し、みやぎゆかりの方々の多彩な活動をご紹介します。